

## 花札の図像学的考察

池間里代子

キーワード

花鳥 (flowers and birds), 四季 (the four seasons), 地口 (play upon words), 鬼札 (a wild card), 謎語画題 (cryptic remarks motif)

### はじめに

花札は日本的な図案でできており、その意匠は大変親しまれている。また、日本の四季の豊かさに着目してつくられており、賭博につきものであった数字を12ヶ月の花や生き物に置き換えることで、絵札に数字の意味合いをもたせている。<sup>1)</sup>しかし、各月に配された花や生き物がどうしてその組み合わせになったのか、不明な点も多い。<sup>2)</sup>筆者は六月の「牡丹に蝶」を端緒として花札の歴史を調べた。なぜならば「牡丹に蝶」は中国画題に由来している点<sup>3)</sup>が他と大きく異なるからである。

中国の吉祥図案には動植物・器物との組み合わせが多く見られる。その特徴は、単品ではそれだけの意味しか持たないものが、他のものと組み合わせられることによって特別な意味を帯びてくることである。たとえば「牡丹に蝶」であれば百花の王と称される牡丹<sup>4)</sup>に群がる蝶、この「蝶」は中国音で「dié」であるが、「耄 (dié) : 80歳」<sup>5)</sup>と同音同声調である。中国画題に「牡丹に猫」というものもあり、これは「猫māo」と「耄 (mào) : 70歳」<sup>6)</sup>とが同音声調違いである。これは牡丹が富貴を、蝶や猫が長寿を象徴していることを表わす。<sup>7)</sup>つまり、六月の札には「富貴長寿」という意味が隠されているのである。<sup>8)</sup>このようなアレゴリーを謎語画題といい、中国の文人画(南宗画)に描かれる花の取り合わせや、果実・野菜の盛物(もりもの)につけられる題名で、花卉名数ともいう。<sup>9)</sup>一説に、このような謎語画題は「明清の常識、江戸の教養、平成の研究対象」なのだそうだ。<sup>10)</sup>花札に中国画題が採用されていることは、他の札にも寓意が込められているのではないかと類推することが可能だろう。

本稿は、花札に見える動植物・器物の組み合わせについて考察し、隠された意味を探ろうとするものである。

## 1. 花札の成立

### 1-1 中国唐代の葉子戯

花札の祖先であるカードゲームの起源をたどろうとしても、現物がほとんど入手できないので大変困難を極める。その起源はエジプト説・インド説・中国説があるが、現在の定説は中国起源説である。その主たる根拠は紙と活版印刷の発明が中国で行なわれたことにあるように思う。

いずれにせよ、古代においては木簡竹簡と同じように木片や竹片などに印をつけて行なわれたかもしれない。中国漢代に紙が発明されてからも、多分遊技に使われるほど潤沢ではなかったのではないかと想像できる。その中で伝説として、唐代の天文学者張遂<sup>11)</sup>が天文学を基に作成したというものがある。<sup>12)</sup> また、唐代の女性が発明したとする説もある。<sup>13)</sup> それは春夏秋冬の四季に分けたもので、大きさが葉ほどのものだったので「葉子戯」の名がある。唐・宋に遊び方の書が散見する。<sup>14)</sup> 明代では40枚、清代では60枚ワンセットであったらしい。(すると、それぞれを四季に分けると明代では一つの季節が10枚、清代では15枚となる。)

トルファンで発見された明代の葉子戯には『水滸伝』の武将図が描かれている。また、美人画・鳥獣画・虫魚画のバージョンもあったらしい。<sup>15)</sup>

なお、この葉子戯から発展した馬吊がマージャンのルーツというのが定説のようである。

この葉子戯がどのように伝播していったのかは推測の域を出ないが、13~14世紀にヨーロッパに伝わったようである。十字軍・サラセン説とマルコ=ポーロ説の2説がある。ヨーロッパのカードは中国起源であり、そこからタロットカードといわゆる「トランプ」に発展していったことが今日の定説となっている。<sup>16)</sup>

### 1-2 ヨーロッパのカード

ヨーロッパに伝わったカードは14世紀イタリアを中心に発達したものと思われる。スイスにいたドイツ人修道士ヨハネスの記述によれば、1377年にカードが伝来したといい、それは各3枚の絵札を含む4枚のマークからなる52枚であった。15世紀初頭には北イタリアでタロットが登場する。初期には手書きだったカードも15世紀前半には木版刷りとなり、ドイツで盛んに生産されたため、イギリスなどでは一時は輸入禁止で対抗した。<sup>17)</sup>

### 1-3 日本へ伝わった「カルタ」から「花札」へ

日本には16世紀後半にポルトガルから48枚のカードが持ち込まれ、「南蛮カルタ」と呼ばれた。(1543)その後日本化して「天正カルタ」となった。(1591)しかし、賭博性が危険視されたため慶長2年(1591)に禁令が出た。その後日本化して「天正カルタ」が登場したが、慶安元年(1648)天正カルタ禁令が出された。貞享年間(1684~1687)に「うんすんカルタ」が流行し、享保年間(1716~1735)では「めくりカルタ」のみが許可された。しかし、明和安永年間(1764~1769)に至ると賭博カルタ全盛を迎え、たびたび禁令が出された。そこで禁令をかいこぐために様々な工夫がこらされ、文化年間(1804~1816)に花札が誕生した。江戸末期において花札はたびたび禁止させられたが、特に松平定信による寛政の改革によって賭博系統のカルタ類が全面的に禁止されたため、「天正カルタ」と教育系カルタの流れをひく「花鳥合せ」とを折衷して創作されたという説が有力である。京都の大石天狗堂が寛政12年(1800)に創業し、花合わせを製造したのが初めという。

天正カルタの構成は4種12枚の計48枚であるが、これを12種4枚に組み換えただけで、天正カルタの遊び方をそのまま引き継ぎ、絵柄を花鳥合せから採り入れて、たくみに偽装して花札が創作されたものと考えられる。この、「花鳥」という言葉であるが単に「花と鳥」の取り合わせのみならず、「花と虫」「花と動物」をも含む、広い概念である。<sup>18)</sup>

しかし、結局禁令が出された。明治元年(1867)に正式に禁止されたが、欧米からトランプが入ってきたことなどから明治19年(1835)解禁となった。

花札は地方バージョンが多かったが、横浜花といわれた現在の「八八花」が明治20年代後半に定着した。<sup>19)</sup>

## 2. 花札の図像解釈

### 2-1 一月の札「松に鶴」

松は常緑樹であり、日本においては正月に飾る神聖な植物である。古くより図案化され、様々な器物や衣服に用いられた意匠である。また中国の画題に松竹梅という「歳寒三友」があり、長寿を暗示している。それに合わせるものとして鶴が選ばれている。鶴は「鶴は千年亀は万年」と言われるように、これも長寿を象徴し、松と同様にさまざまな意匠となっている。ゆえに一月の札に「松に鶴」は至極当然な取り合わせと考えられてきた。

しかし近年、鶴の生態からして松にとまることは不可能だ、これはコウノトリと誤認したものではないか、という説が唱えられている。つまり「松にコウノトリ」説である。しかし、私は以下によってこの説を退ける。

まず、古語では「つる」「たづ」の二語が存在し、歌には「たづ」が多用されてきた。

「たづ」とは大型の水鳥を指しており、鶴・コウノトリ・白鳥・鷺などが「たづ」と総称された。<sup>20)</sup> とくに白い鳥は神寵を受けたものとして神聖視された。<sup>21)</sup> その中で鶴とコウノトリは遠目での姿をしばしば見間違えられてきたようである。しかし一月の花札には「たづ」ではなく「つる」である必要があったと考えられる。なぜならば二月・三月の花札で用いられている言葉遊びの要素を考えるなら、「まつにつる」という尻取りでなくてはならない。「まつにこうのとり」では言葉遊びにならないのである。

そもそも花札の鶴は松と共に描かれているに過ぎず、別に松にとまっているのではないのだ。

ゆえに、この月は「松に鶴」が正しく、その寓意は「長寿を寿ぐ」という読み方で良いと言える。

なお、地方バージョンの一つ「越後花」という花札には和歌が添えられている月もあり、一月には「ときはなる松の緑も春くれば 今日一しほの色まさりける (古今)」が書かれている。和歌が書かれている花札はより古い形を残しているとみなされている。<sup>22)</sup>



任天堂製、著者蔵  
(以下同じ)

## 2-2 二月の札「梅に鷺」

梅は「松竹梅」の中に含まれ、古来より歌によまれたり、その意匠が器物・衣装のみならず菓子にも応用されてきた、大変身近な植物である。五弁の花びらが五徳（福祿寿喜財）を暗示し、春に先駆けて咲くという点でも大変好まれた植物である。この梅に鷺

が合わされている。早春を謳歌する好ましい組み合わせといえよう。

しかしこれもまた近年、鶯の色は本来もっと地味であり、鶯はその食性によって梅の木よりも藪を好む<sup>23)</sup>ことから「梅にめじろ」説が浮上してきた。これも私は以下の二点によって退けたい。

第一に、一月の札でも述べたが「うめにうぐいす」という頭韻を踏ませているのだと考える方が妥当であろう。一月で「まつにつる」と尻取りを使ったのだから「うめにめじろ」と同工ではつまらない。そもそも、めじろの声は鶯ほど特徴的ではないし音量も小さい。早春の静寂を破って「ホーホケキョ」と一声鳴くことにこの札の意義がある。

第二に、越後花でも「梅に鶯」を採用している。そこに書かれている和歌は「うぐいすの鳴音はしるき梅の花 色まがへとや雪の降るらん (古今)」である。

古来「梅に鶯」は定番中の定番であったと推測できる。そもそもめじろの特徴は数羽がくっついて「めじろ押し」をすることではなかったか。もしめじろを描くのであれば生態的特徴である「めじろ押し」を描くはずである。

結論は「梅に鶯」でもって、早春の凜とした花の木と、それにとまって春を告げる鳥を配したものである。

また、中国画題では「梅梢 (méishāo) : 梅の梢」と「眉笑 (méixiào) : 嬉しくて眉がほころぶ」とが近音であることから、大変おめでたいものとされている。<sup>24)</sup>

### 2-3 三月の札「満開の桜に幔幕」

梅の次に桜を持ってくるのは当然として、なぜこの月は幔幕を強調しているのだろうか。そしてなぜ鳥がないのであろうか。

まず考えられるのは「まんかいにまんまく」で「まん」の頭韻を踏んでいることが考えられる。

またこの月は赤短に「みよしの」という文言が入っているが、この月だけの現象である。思うに、越後花に書かれている和歌「み吉野の桜散りにけり あらしもしろき春のあけぼの」の作者である後鳥羽上皇の御名「後鳥羽」に鳥の意を汲み、和歌のうたいだし「みよしの」を短冊に書くことによって他の歌ではなく、後鳥羽上皇の「みよしの」であると、強調しているのではないだろうか。

一月・二月の赤短「あかよろし」については後述する。

### 2-4 四月の花札「藤に時鳥」

藤は古来より意匠に用いられ、家紋にも使われて大変身近な植物であった。時鳥（ほととぎす）も『枕草子』で特徴のある鳴き声が愛された。この取り合わせは、垂れて動きのある藤を波に見立て、動的かつ初夏らしい爽やかさを感じさせる。

そしてここでも「ふじにじちょう (時鳥)」という尻取りを使っている。越後花に見

える和歌は「藤波の咲き行く見れば ほととぎす 鳴くべき時に近づきにけり (万葉)」である。

藤の花は晩春から初夏にかけて咲き、時鳥とは時期が重なるので、写実的な万葉集では、藤の花に時鳥を取り合わせている。ところが、平安時代以降は、藤は春のもの、時鳥は夏のものとしたので、この二つを一首の中に詠みこまなくなったのである。<sup>25)</sup>しかし、花札では藤の花と時鳥の組み合わせを採用した。観念ではなく現実的な視点が窺える。

## 2-5 五月の花札「杜若に八橋」

五月の図柄は端午の節句から菖蒲を連想するが、これも越後花に「唐衣きつつなれにしつましあれあば はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ (古今)」<sup>26)</sup>とあるように「かきつばた」である。これに八橋を合わせているのは「かきつにやつ」という省略形の脚韻と思われる。現在でも華道界では「杜若 (かきつばた)」を「かきつ」と略称している。

八橋は、幅の狭い橋板を折れ折れに継ぎ渡した橋で、菖蒲園などによくある。『伊勢物語』に「三河の国八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木のかげにおりゐて、乾飯食ひけり。その沢に、かきつばたいとおもしろく咲きたり。」とあり、八橋は歌枕となったのである。<sup>27)</sup>

また、杜若は別名を「燕子花」<sup>28)</sup>というので鳥に見立てているかもしれない。

なお、杜若は花札に登場する植物の中で唯一の水生植物であり、球根植物である。ここに五月の独自性を持ってきたと推測できる。

## 2-6 六月の花札「牡丹に蝶」

この月の札が中国画題由来であることは前述した通りである。それは越後花にこの月の和歌が無いことから指摘できよう。

そもそも牡丹は中国唐代において大変もてはやされた花で、「花王」の異名を持つ。花の咲き方が豪華なことから「富貴」の寓意が込められ、蝶や猫と取り合わせた画題が出来上がった。日本に伝わった当初は「唐獅子牡丹」として、異国の珍しい取り合わせであった。一説には、仏教上の伝説に由来するともいわれるが、帝王と獅子の西方ペルシアの影響も感じられる。<sup>29)</sup>特に「唐獅子」については現物が日本にいないせいもあって、あたかも想像上の動物かの如く扱われた。そのためか、牡丹の意匠は庶民にはあまり受け入れられなかった。

しかし、江戸時代になり南宗画が一般化するに従い、牡丹は親しまれるようになり、茶道の七事式で用いる十種香札にも採用されるほどになった。<sup>30)</sup>

そこで「牡丹に蝶」である。一月～五月までの和風を変化させて中国風にした理由は

何であろうか？ 思うに、牡丹に決定した理由は、次の七月に萩を出す伏線ではあるまいか。七月は旧暦では秋である。秋の七草<sup>31)</sup> 冒頭によまれた「萩」の前に「牡丹」を配すことにより、より自然に移行させようとしたと考えられる。牡丹と萩といえば「ぼたもちとおはぎ」の語源とされている。つまり、牡丹を出しておけば次の萩が想起されるのである。

### 2-7 七月の花札「萩に猪」

この月の越後花には和歌がついていない。中国画題にも登場しない。そもそも中国では萩に対する思い入れがあまりない。「萩に猪」という組み合わせは今まで謎とされてきた。<sup>32)</sup> が、六月で述べたように萩は「秋の七草」の筆頭であり、「ぼたもち・おはぎ」つながりで七月（旧暦では秋）の花として採用されたのだろう。謎はなぜ「猪」が配されているのかである。これは次のように解釈できるのではないだろうか。

六月「牡丹に蝶」は本来「牡丹に唐獅子」を置きたかったが、おそらく唐獅子を避けて「蝶」になった。一つには唐獅子・牡丹はスペースの問題で二つ入れると大きすぎたからであろう。二つには刺青の図柄に「唐獅子牡丹」があるために、賭場を連想させてしまうのを防ぐ意味があったのかも知れない。あるいは百獣の王とはいえ肉食獣を描くことに抵抗があったかも知れない。いずれにせよ、「牡丹にからじし」と「萩にいのしし」という提喩（シネクドキ）<sup>33)</sup> が行なわれたのではないだろうか。もちろん「からじし」「いのしし」の地口である。

別の視点から「萩に猪」を考察すると、六月の「牡丹」を「ぼうたん」と読み、猪の子供「瓜坊（うりぼう）」の伏線にした。

### 2-8 八月の花札「薄に月」

この月も「すすきにつき（もちづき）」で脚韻を踏んでいる。

越後花に「行く末は空もひとつに武蔵野の 草の原より生ずる月かげ（新古今）」という和歌が添えられており、それに基づくだけでなく花札の異名として「武蔵野」がある。この月はこの和歌実写版とも言える。秋の鳥として渡り鳥である雁を三羽描き、雁行を表している。<sup>34)</sup>

この札は一月の旭日と対になっていると同時に、次の九月の菊とも対になっている。（後述）

なお、花札の遊び方に「オイチョカブ」があるが、それは南蛮カルタ時代の8をオイチョウ・9をカブというのにちなむ。現代スペイン語では8をocho（オーチョ）という。

### 2-9 九月の花札「菊に盃」

まず、「きくにさかずき」で頭脚韻を踏んでいることが指摘できる。

前項で触れた、八月の満月と九月の菊とがどのように対比関係にあるかという点、八月には満月が描かれているので見れば「月」だとすぐに理解できる。九月の菊は中心から放射線状に花が咲き、どの花よりも球形に近く咲く。そもそも菊の古字は鞠である。そこで「太陽」を連想させるのである。つまり菊は太陽のメタファーなのだ。そこで九月九日は重陽節として重要な節句となった。その際、菊酒を飲む習慣が生まれた。<sup>35)</sup> この月に盃が配されているのも中国画題としては当然のことである。

また、越後花に和歌がないことから中国の重陽を意識していると言えよう。盃に「寿」字が書かれているが、これは宋代の張敏叔が「花十二客」を決めた際に菊には「寿客」と付けたことにちなむ。<sup>36)</sup> また、菊は別名延寿客ともいう。一説には「菊盃 (júbēi) : 菊と盃」と「拳盃 (quánbēi) : 盃を挙げる」とが音通しているようだ。<sup>37)</sup>

なお、「オイチョカブ」の「カブ」は9の事であるらしく、菊も「一株、二株」と数える。

## 2-10 十月の花札「紅葉に鹿」

この組み合わせは大変日本的だと思われていて、越後花にも「下紅葉かつ散る山の夕時雨 ぬれてやひとり鹿の鳴くらん (新古今)」と書かれている。鹿がそっぽを向いている十月の札なので、無視することを「しかとう」から「しかと」になったという逸話も有名だ。

しかし、実は天正カルタに「棍棒 (ハウ) の10」札の事を「釈迦十」と呼んでおり、「しゃか」と「しか」の地口にして十月に配したとも考えられる。<sup>38)</sup>

他に考えられるのは、この月が「牡丹に蝶」「菊に盃」と同じく青短付きであることから、中国画題の「鹿 (lù)」=「禄 (lù)」に関係するかもしれないことである。<sup>39)</sup> 中国では鹿は常に仙人の傍らにいて、「福禄寿」の「禄」を表現している。

もちろん「猪鹿蝶」のひとつでもある。この点は後述する。

## 2-11 十一月の花札「小野道風に蛙に燕」

十一月と十二月の札は「鬼札 (ジョーカー)」説が有力である。十一月を詳しく見ると、小野道風が傘をさして柳に飛びつく蛙を見ている。次の札は柳に燕が飛んでいる。カス札には鬼瓦に雷と太鼓が描かれている。<sup>40)</sup> これらは十一月の風景ではなく、柳と燕は春を<sup>41)</sup>、傘と蛙は梅雨を、雷は夏を想起する。また、カス札に見える雷と太鼓は江戸の洒落言葉「雨降りの太鼓一ドンならん (どうにもならん)」と思われ、ジョーカー説を後押しするものである。

この月は古くは柳に番傘、あるいは柳に番傘を差して走る斧定九郎だったようだ。斧定九郎とは「仮名手本忠臣蔵」五段目に登場する人物で、塩冶の浪士 (赤穂浪士) でありながら敵方に内通している斧九太夫の息子という設定で、山賊に成り果てた人物であ



る。元々端役だった斧定九郎役を中村仲蔵という役者が演技を工夫し、若手花形役者の役どころとして定着をみた。<sup>42)</sup>

それが明治になってから小野道風に変わったという。その理由は教育的効果が考えら



れる。小野道風は平安時代の三蹟の一人で、和様書道の基礎を築いた。そんな道風も若い時に自分の才能の無さにスランプを感じ、雨の中を歩いていると蛙が柳に飛びつこうとしているのを見かけた。道風は内心「蛙は馬鹿だ」と思っていたが、何かの拍子に蛙が柳に飛びつくことができた。それを見た道風は天啓を受け「馬鹿は自分である」と悟った。それから努力をして三蹟の一員となった、というストーリーである。つまり、斧九郎という盗賊崩れよりもずっと教育的であるということから図柄が変換されたものと思われる。また、当然のことながら「斧」と「小野」が同音であることも最大なる理由であろう。

また、番傘が雷神の雨を受け止めるアンテナの役割を果たしているとも言えよう。

ちなみに、中国画題では「柳に燕」「柳に蝙蝠」というものが見える。いずれも、しだれて風になびく柳と動きの俊敏な燕や蝙蝠を配して、動的な構図を作ったものと見られる。

## 2-12 十二月の花札「桐に鳳凰」

十二月の桐は、春に花を咲かせ秋に結実するものであり、決して十二月のものではない。それに配している鳳凰は中国の想像上の動物である。この動物は桐に巣くうと言われている。<sup>43)</sup>

また、「ピンからキリまで」の「ピン」はポルトガル語で「ピント（1）」を表わし、「キリ」は「最終」をいうことから「キリ」と「桐」とを掛詞にしたという定説がある。

その他に文様で梧桐は「琴によい（殊によい）」、つまり桐の木は琴の材料として用いられたことを背景に洒落た、とみることもできる。

さらに、花札で多用される尻取り・頭韻・脚韻の方面を考察すると、「ごどうにほうおう」と「おう」押韻しているのではないかと指摘もできよう。

いずれにせよ、十一月同様十二月の札もまた鬼札（ジョーカー）であろうことは、使用されている花が季節はずれであり、合わされている鳥が想像上のものであることから言えるのではないか。

## 3. 役の解釈

### 3-1 赤短

三月の「桜に幔幕」で赤短に書かれている「みよしの」は後鳥羽上皇の御製の上句「みよしのの」であると指摘した。それでは一月の「松に鶴」・二月の「梅に鶯」に書かれている「あかよろし」とは一体何であろうか。ものの本には「あきらかでよい」とあるが、果たしてそれで良いだろうか。

そこで「あかよろし」の解釈を試みる。

越後花の一月にある和歌「ときはなる松の緑も春くれば 今一しほの色まさりける（古今）」を見る限り、色に関する記述は松の緑しかないので「あかよろし」の手がかりになるものは見当たらない。しかし、二月の和歌「うぐいすの鳴音はしるき梅の花 色まがへとや雪の降るらん（古今）」を見ると、梅の花は雪と見間違えるほどに「白い」のである。ところが札を見ると梅の花は赤い。そして短冊には「あかよろし」と書かれている。そこから「梅の花の色は（白もいいが）赤もいい」との意を汲み取ることができのではないだろうか。さらに、一月の札を見ると「白い鶴と赤い太陽（おそらく日の出）」である。ここにも「しろ」と「あか」の対比が見える。すると、「あかよろし」の中に「あか→」と「←ろし」が見える。つまり「よ」を挟んで左半分が「あか、つまり赤」で、右半分が「しろ、つまり白」と読める。上から読んで「あかよ」下から読んで「しろよ」となる。

ここで「よ」について考察を加えたい。「よ」は「与」からできた仮名である。「与」は「と（&の意）」とも読めるから、ここは「赤と白」と読解できる。一月の「松に鶴」

は「赤い日の出と白い鶴」を意味し、二月の「梅に鶯」は「赤い梅も白い梅もどちらもきれいだ」を意味すると考えられる。

### 3-2 三光

三光については定説があるので、それを紹介する。

天正カルタを摺ったとおぼしき版木を見ると、聖杯（コップ）・貨幣（オウル）・棍棒（パオ）・剣（エスパーダ）の4種類、数は1から9まで、絵札は女従者（10）・騎士（11）・王（12）の48枚で構成されている。棍棒は青く塗られていたらしい。そのうち棍棒の2（青二）・棍棒の10（釈迦十）・棍棒の1（あさ）を三皇と名付け「これさえ手に入れば、打たぬ先に勝ったも同じ」とされていた。<sup>44)</sup> この「三皇」（オールマイティ札）が「三光」となったらしい。

ここから「赤短」「青短」「猪鹿蝶」などの役札が3枚ワンセットとなったのだと推察できる。

### 3-3 青短

六月の「牡丹に蝶」・九月の「菊に盃」・十月の「鹿に紅葉」にそれぞれ青短が入っている。その意味を考察すると、天正カルタの聖杯＝菊に盃・貨幣＝鹿に紅葉（前述、鹿lùと緑lǜ）をそれぞれ例えているのではないだろうか。特に「3-2 三光」の項で触れたように、棍棒の10（釈迦十）が「2-10 鹿に紅葉」の根拠である「しゃか十」「しか十」の地口であるとするならば、天正カルタで青く塗られた棍棒の10の名残と見ることも可能である。

では、なぜ六月の「牡丹に蝶」が青短の仲間に入っているのだろうか。これは私見ではあるが、赤短は一月・二月・三月と春に集中している。それに比べて青短は六月・九月・十月のように夏以降に集中している。12ヶ月の中で十一月と十二月を鬼札として除外すると、六月というのは一年の後半に属しているのである。そこで青短は一年の後半、特に秋を意識して選ばれたのではないだろうか。また、実際に牡丹は冬咲きもあるので秋～冬の季節を代表するものとみなされたのかもしれない。

あるいは「鹿に紅葉」が固定されていて、その仲間に中国画題つながりで「牡丹に蝶」「菊に盃」が入ったのかもしれない。

試みに越後花の青短を見ると任天堂製のものは「㊦請合」という文字が書かれている。六月の牡丹のカス札にも「㊦」が見え、越後花の赤短には逆に文字がない。大石天狗堂製のものは「㊧請合」とある。つまり、越後花では青短に漢字を書き、八八花では赤短にひらがなが書かれているわけである。このことから、青短は「牡丹と蝶」「菊と盃」の中国画題つながりである可能性が高いと指摘できる。

では、越後花に見える「㊦、㊧請合」とはどのような意味なのであろうか。「請合」





を和語で解釈すると「ひきうけること。うけあうこと。保証すること。」とある。<sup>45)</sup>「福(や大)をうけあう。福(や大)を保証する。」といった意味になろう。では漢語で解釈してみると「請(qǐng):どうぞ~して下さい」「合(hé):合わせる」なので「どうぞ合わせてください。」の意味になる。どちらも意味は通じるようであるが、福字・大字が丸で囲まれていることから類推すると「福・大という文字を合わせて(集めて)ください。」が適当ではないだろうか。

### 3-4 猪鹿蝶

この役はすべて非「鳥」の集合である。一月は鶴・二月は鶯・四月は時鳥・八月は雁・十一月は燕・十二月は鳳凰というように、6枚の札には鳥が描かれている。その他の三月(後鳥羽上皇御製の歌なので「後鳥羽」に鳥を見出したものか?)・五月(杜若は別名燕子花という)についてはメタファーとしての「鳥」を含んでいる。九月の「菊に盃」については、菊が太陽のメタファーとすれば、太陽と関係の深いカラス(三足鳥)が想起される。<sup>46)</sup>

しかるに、この猪鹿蝶3枚については鳥と無縁なのである。一体どんな意図があってこのような役になったのだろうか。

一つ考えられるのは、この3枚に描かれている動物・虫がいずれも鳥より足の数が多

いことである。猪と鹿は四つ足、蝶は六足である。ゆえに「足が多い→おあしが多い（お金が多い）」のアレゴリーなのではないだろうか。

## おわりに

これまで花札の意匠が持つ意味について考察してきた。花札は江戸後期に発生し、明治になって解禁された。比較的最近発売されたにしては、なぜその月にその取り合わせなのか、赤短・青短・猪鹿蝶の意味など不明な点が多い。そこで中国画題の解釈を転用して、考察を試みた。

今ここに、本論で取り上げなかった図像的問題を挙げてみる。

### ・鳥の生態。

画論では、鳥の絵には「飛・鳴・宿・食」四態があるという。<sup>47)</sup> 花札では「飛」が最も多く四月の時鳥・八月の雁・燕の十一月がある。「鳴」は二月の鶯、「宿」は十二月の鳳凰である。ただ一月の鶴は不明である。

### ・「虫札」の意味。

八八花で、六月・七月の札を減らし、40枚構成のものを「虫札」という。

六・七月を「無視」するから「虫札」というならわかるが、残った方をなぜ「虫札」というのかが不明である。

### ・気象の意味。

各月の花札を注意深く見ていると、「晴れ」「曇り」「雨（十一月のみ）」の別がある。「晴れ」は一月・四月・八月・十月、理由は雲が描かれていないからである。「曇り」は二月・五月・六月・七月・九月である。ところが、三月と十二月が不明なのである。花札に気象が描かれている、あるいは描かれていない意味について、考察が必要と思われる。なお、十二月の鳳凰については古代において風の神と信じられていたということもあり<sup>48)</sup>、十一月の雷雨とともに一考を要する。

さらに、花札に取り上げられた植物について、2-6「牡丹に蝶」でも触れた「十種香札」との相関をもっと掘り下げるべきではないかと考えている。注30では裏千家の場合を紹介したが、流派によって多少の異動があるようだ。その中で共通するのは藤・薄・紅葉が花札独自のもので、逆に花札に無いものが竹である。なぜ花札に竹がないのか、この点も考察すべきだろう。中国画題において竹(zhú)は祝(zhù)と音通とされ、多用されているからである。

最後に、「八八花」といい「コイコイ」とも言う、その理由について。

一月～十二月の花札を並べて見てみると、短冊が「八八」「こいこい」の形に見える。

おそらくこのような理由から名付けられたものと推察される。

「はじめに」でも述べたが、花札の図像学的考察をするきっかけは中国謎語画題の研究を要請され、その中の「牡丹に蝶」を端緒としたものである。謎語画題については別途発表の機会を持ちたいと考えている。貴重なご意見を頂いた二葉流南宗盛物の鈴木春兆・芳春両先生と六句会の各位に謝意を表す。

## 注

- 1) 『かるた』 p.35 NHK美の壺 2008年11月
- 2) 「花札の図柄の古典的背景」 p.6 大川五兵衛『文学研究』第16号 聖徳大学短期大学部国語国文学会 2001年2月
- 3) 『日本の意匠事典』 p.135 岩崎美術社 1984年5月
- 4) 「牡丹の花ことば=富貴というイメージが一般に普及したのは、宋代の周敦頤が『愛蓮説』の中で菊、牡丹、蓮の三者の徳を比較しながら、「…牡丹は花の富貴なるものなり、…」と定義してみせた以降のことらしく」『中国の花ことば』 p.64 中村公一 岩崎美術社 1986年2月
- 5) 「耄、年八十曰。」『説文解字』許慎 p.173 中華書局 1963年12月
- 6) 「七十曰耄、八十曰耋。」『中国祥瑞象徴図説』 p.227 人民美術出版社 2004年5月
- 7) 前掲書『中国祥瑞象徴図説』 p.281  
また、「ほうたんやしろがねの猫こがねの蝶」蕪村 という句もある。
- 8) 前掲書『中国祥瑞象徴図説』 p.281
- 9) 『いけばな便利帳』 p.126 主婦の友社 1998年7月
- 10) 『花鳥・山水画を読み解く—中国絵画の意味』はしがき 宮崎法子 角川叢書24 2003年6月
- 11) 張遂、永淳元年(683)～開元15年(727)。唐代中期の僧で真言宗伝持八祖の一人。一行和尚。禪・天台・戒律の他に道教にも通じ、玄宗の帰依を受けた。算法・暦法にも詳しく『大衍曆』を作成、日本でも使用された。
- 12) 『閑敲棋子』 p.248 韦明铤 云南人民出版社 2007年2月
- 13) 『女子游藝』 p.213 殷偉 文物出版社 2003年6月
- 14) 『同昌公主伝』唐・蘇頌。『擊蒙小葉子格一卷』五代・李煜の妻周氏。『葉子格』宋史・芸文志。前掲書『閑敲棋子』 p.249
- 15) 前掲書『閑敲棋子』 p.252
- 16) 前掲書『閑敲棋子』 p.246 なお、「トランプ」はもと「ジョーカー」の意味なので、正しくは「カード」と言う。
- 17) 『世界大百科事典』第20巻 p.469 平凡社 1988年4月
- 18) 『江戸の花鳥画』 p.16 今橋理子 スカイドア 1995年4月
- 19) 『世界大百科事典』第22巻 p.695～696 平凡社 1988年4月
- 20) 「続・古歌の動植物取合せ考」 p.7 大川五兵衛『文学研究』第14号 聖徳大学短期大学部国語国文学会 1999年1月

- 21) 前掲書『世界大百科事典』第20巻 p.471
- 22) 『いろはかるた』p.161 別冊太陽 平凡社 1974年11月
- 23) 「古歌の動植物取合せ考」p.44 大川五兵衛 『文学研究』第13号 聖徳大学短期大学部国語国文学会 1998年1月
- 24) 前掲書『中国祥瑞象徴図説』p.131
- 25) 前掲書「古歌の動植物取合せ考」p.49
- 26) 前掲書「花札の図柄の古典的背景」p.4
- 27) 前掲書「花札の図柄の古典的背景」p.4
- 28) 前掲書『いけばな便利帳』p.39
- 29) 『日本の意匠事典』p.134 岩崎美術社 1984年5月
- 30) 『茶の湯 裏千家』p.224 千宗左 主婦の友社 1966年12月 「菊・桐・松・竹・梅・桜・柳・萩・水仙・牡丹」の香札が見える。
- 31) 「萩の花 尾花 葛花 瞿麦の花 女郎花 また藤袴 朝貌の花」(万葉・1538)
- 32) 前掲書「花札の図柄の古典的背景」p.6
- 33) 上位概念を下位概念で(またその逆に)言い換えるのを提喩(シネクドキ)といい、換喩(概念の関連・近接性に基づいて語句の意味を拡張して用いる)に含めることもある。「ウィキペディア」<http://ja.wikipedia.org/> 修辞技法
- 34) 前掲書「花札の図柄の古典的背景」p.7
- 35) 『荆楚歳時記』p.217 平凡社東洋文庫 1978年2月  
「菊花酒の作り方は『西京雜記』卷三に、菊花舒く時、並びに茎・葉を採り、黍・米と雜えて之を醸す。來年九月九日に至り、始めて熟し就いて飲む。故に之を菊花酒と謂う」とある。」
- 36) 『中国シンボル・イメージ図典』p.100 東京堂出版 2003年4月
- 37) 前掲書『中国の花ことば』p.155
- 38) 前掲書『いろはかるた』p.128
- 39) 前掲書『中国祥瑞象徴図説』p.106
- 40) 八八花の特徴。八八花は全国の地方札の図案を統一したものとされている。「ウィキペディア」<http://ja.wikipedia.org/> 花札・種類・花札系
- 41) 「秋の雁に対して燕は春の渡り鳥として取り上げられる」前掲書『日本・中国の文様事典』p.107
- 42) <http://www2.rosenet.ne.jp> 歌舞伎のおはなし第99話
- 43) 前掲書「花札の図柄の古典的背景」p.9 なお、鳳凰は鷄頭・蛇頸・燕頷・龜背・魚尾。
- 44) 前掲書『いろはカルタ』p.128
- 45) 『大漢和辞典』
- 46) 『中国山水画の誕生』p.382 マイケル・サリヴァン 青土社 2005年11月
- 47) 前掲書『世界大百科事典』第5巻 p.390
- 48) 『新字源』風部の「解説」